

何づれも散り散りに、我家をさして入ッて行ッた。夕靄濃くなり増る此狭き道の真ん中に、彼の石のみは、『ハチ！。處を得ぬ！！』と云ふ見得で、獨りツツテンと、取り残されて終ひました。

(二)

暫くすると遙か向方の、——青山様の裏門から一町許り西へ反対側の、幻のやうにポツと浮き出された下村様の屋敷の草葺門が、夢の様に幽かに動いたと思ふと、内から一人の花やかな小娘が顯れた。此は下村様の一人娘、名は花枝さんと云ッて、此年ヤット十六の蕾の春、縹緲が善うて、氣立が善うて、親に孝行の、毎もニコ／＼して居らるゝ愛嬌善しの、親様は申すに及ばず、近所での可愛がられもので有る。下村様と云ふと、如何にも其當主様が生き居らるゝやうだが、實は一昨年の春死なれたので、今は母親様が戸主となッて居らるゝ。が、今でも近所では下村様々々々と、呼んで居る。——下村様には相違ないが——。此御當主

で有ッた下村様と云ふのは、昔は勿論武士で、藩のお納戸役と云ふを務めて、録高二百石も取ッて居られたが、堅實な方で有ッたので、お維新後も下手な士族商賣も始めず、村に學校を開ひて儉約に暮して居られたから、今だに金録公債も其儘有るとの噂、して家、屋敷の外に幾分の田地田畑も持ッて居られたから、可な有福の、夫に別れた奥様も別に難義もせせ、たゞ遊んで喰ッて行かるゝが、たゞ遊んで居ても命冥加と、今では近所や知己の仕立物をして居らるゝ。た子さんも澤山有られたが何づれも死なれて、今は此花枝さんがたゞ一人！。

(三)

ツイ近所まで使ひに行かるゝか、仕立物でも持ッて行かるゝので有らう。布呂敷包みを両手に載せていそ／＼遣ッて來られたが、彼の石の有る處まで來ると、少し驚いたやうに急に歩みを止めて、『お前へ、榮らい處に道を塞げてお出でだねわ。』と云ッたやうに、ホ、。と笑ひを聲にまで出ゐて、さて石に觸れぬやう

静に隅を通って行かれました。

頂度其れから五六歩程も行かれたと思ふ頃、急に立ち止って再び彼の石を眺め、「お前まだ其處にお出でかい。私能く考へるとどうやらお前を一度見た事が有るやうだわね。何處だつたかね。ツイ近所の藪の中かしら。それとも私が生れて來ぬ前の、お屋敷の庭かしら。それは兎も角、お前はまだ其處にお出でだらうね。私はツイ其處まで行って歸りは少し暗くなるも知れないけど、私はお前のお出でる處をチャント覚えて置くから、私を倒さうと思つても、さうは行かないよ。」と云つたやうに、此石との偶然の邂逅に、或る不可思議な因縁を感じるかの如く、慇懃に眺め遣つて、さて後行かれました。

(四)

やがて此花枝さんが三四町程を行つて、北へ曲かられるか、曲がられんに、青山様の裏門の戸が開いて、内から脊の高い、肩幅の廣い、二十四五の好貌の青年が

顧れました。此は青山様の三男、名は芳雄さんと云つて、京都の文科大學生で有る。が、少し胃が悪い爲めに暫く歸省して居らる。此芳雄さんのお父さんの青山様と云ふは、昔は矢張武士で、下村様より遙か下役の同心と云ふ役をつとめて居られたが、お維新後はズット出世して今は海軍後備大尉で居らる。芳雄さんが花枝さんに惚れて居るとか、花枝さんが芳雄さんに惚れて居るとか、イヤ二人は親々か既に許した末は夫婦の嬉しい許婚の仲で有ると、か二人に就いていろくの噂が高い。それも其筈二人はそろひもろつた美しい男、美しい女で有る上に、氣立も似寄つて、特に二人は常に往き來して睦じいから——。

(五)

芳雄さんが出頭らに、向方を見られた時は、頂度花枝さんが北へ曲がらるゝ處で有つた。「ア。今のは確に花枝さん！。今頃何處へ行くのだらう。夕暮はイヤに人か薄く見ゆるなア。恰で自分に別れて一人闇の國を彷徨つて行くやうだ。」

と呟きながら願って彼の石を認め、其儘無言で隅の方へ押し遣られた。芳雄さんは温厚な君子肌の人で有るから、『日本人は公德が……』なんぞと、餘計な事を呟かれなんだ。して何處ともなく打出す鐘と共に御室に打出さるゝ星を數へながら、暫時其處此處を横行し濶歩して、さて後心廣く体胖也と云ふ見得で、靜に家へと入って行かれました。

(六)

さて花枝さんが使ひを終わて再び此路筋へ來かゝられた時は、モ一日もトツアリと暮れて、宵闇の鼻をつまゝれても解らぬやうな暗さで有りました。モ一家ま近き處とは云へ繋有小娘の、おさへ切れぬ怖さに胸を痛めて少し小走りに遣つて來られたが、不意に後から犬の吠き聲が聞え出して、此方へ近寄つて來る氣合がしたので、一生懸命に駆け出されたが、ろれでも利巧な事には石の有る處を確乎と知って居て、避け得た積りで隅みを通ほられたが、氣の毒な事には其れが却つ

て花枝さんの不幸になつて、其が爲め花枝さんは石に躓ひて倒れらるゝと、又其上に前に有つた瓦の破片で額をさへ傷付けられた。此時かの芳雄さんは何事も知らずに自分の小さき書齋に閉ぢまもつて心靜に、『戀の花園。』と云つたやうな平和な題を選んで頰り甘き空想に耽つて居られたが、不意に裏の方に當つて一聲キヤット女のタマギルやうな聲が幽にさよわたので、其儘筆を止めて聞き耳をたてられたが、つゞいて何の音もしなかつたので耳の迷ひかとも思つてまた筆をつゞけられたので有つた。それも其筈、花枝さんは一度氣絶して直に氣がつくと、人を呼ばずに其儘額をかゝゐて家へ走り込まれたから、それでも不思議な事には昨夜あれから芳雄さんは、全然興趣を剝がれて、如何に悶々でも文思がまとまらなんだとの事、今朝に成つてあゝいたわしや、花枝さんはあの傷がもとになつて、災ひの上に災ひ、遂々腦膜炎をさへ引き起されました。

(七)

やがて十時頃になつて始めて芳雄さんは花枝さんの許から態々來た使ひに、昨夜の一部一什と、今の花枝さんの容体を詳しく聞かれて、其意外な出來事に一時茫うとして終はれた。して、幾分氣を取り直すと、自分の無意になした彼の事が、否、寧ろ善なる動機を以てなした彼の事が、却つて計つて人を死地に陥れたと同じ結果を、然も我が切愛する戀人の上に持ち來らされた事を深く悲しんで有られた。して遂に見舞に行かれて、花枝さんのひきつけらるゝ痛ましき有様を見、母親様の悲み感ほるゝ切なき有様を見られた時には、其悲しみは遂に芳雄さんの醒覺された無意の行爲の甚しき不成功の悩みとなつた。所謂良心の何んとか云ふ事はマキにして……。花枝さんの母親様は此の悲しみ感ひの中よりも尙ほ、此事は花枝の悪しき運命の然らしむ處で、決して芳雄さんの石を動かしたと動かさぬには關せぬ事を云はるゝ、此はたゞに芳雄さんの苦しき胸中を察して、ろを慰る爲めに強ひて然か云はるゝ許りでなく、自分にも確かどさう信んじて居

らるるやうで有る。芳雄さんとても此場合然か信じ得られたなれば信に結構で有るけれども、實は芳雄さんもさう信んじて幾分胸の腦みが免れたひので有るが、飽までも人の可能の上に立脚して一切の運命と云ふ事を否定し、たゞ此上へのみ飽くなく原因結果の追窮を遣る、現代の科學的新教育を受けた芳雄さんにはどうもさう信んざる事が出來ん。たゞひ自分が全然進んで手を下したのでなくとも、又自分のなした事が花枝さんを此處に持ち來たした總てゝなかつたにしたとあるが、其他又何にしたとあるが、計らざるも遂に溢れしめたコップの一分の水量となつた感は如何しても免れなかつた。で芳雄さんの胸中に自然起り來たつた考へは、計らなんだ事は計らなんだて仕方がないから、自分の醒覺された行爲の甚しき不成功が尙ほ最後にまで進行せざる中に、其を喰ひ止むべく又全然其を元とに返へまべく或行爲をせる事で有つた。即ち言葉をかへて云ふと及ぶだけの力を盡して花枝さんを改腹さする事で有つた。實際芳雄さんが今一度花枝さんを元にかへま

べく、拂はれた注意と盡力は莫大なもので有った。換氣から室内の温度、人の足音まで怒鳴ならるゝ様は寧ろ狂氣の様で有った。が、芳雄さんの醒覺された無意の行爲の失敗はとう／＼最後まで進んだ——花枝さんは遂に死なれました。

(八)

うれからと云ふもの芳雄さんは甚しく憂鬱の人となられました。して今までは此れは何々の結果で有る。慙う云ふ原因があるから慙うで有るとやうに云はれたのが、今は何事もそれは疑問で有る。うれは運命で有る。思議まべからざる事で有るとやうに云はるゝ。もし人が試みに人が米を播ひたから米を得たとても云はうものなら、芳雄さんはたゞちに其れは疑問有るとやうに云はるゝ。して次にどんな事を云はるかど云ふに、『人は多くの場合米を播くと米を得られるから、米を播くと米を得られるやう思ふが、實は疑問で有る。現に世の人でも、蟲が鳥となり、鳥が獸となり、獸が人となつたと云ふやうな、進化の理を信んずるでないか。

實際米には總ての物と同じやうに米のみならぬ一切の力が含まれ有る。此物が何時如何なる場合に、人の所謂米ならぬ者と發現するか知れ無でないか。人は多くの場合、今では殆んど總ての場合、偶然にも米を播くと米を得られるから、米を播くと必ら米を得られるやう信じるが、何時如何な場合にも米を播くと必ら米を得られるかは疑問で有る。多くの人や芳雄さんの友達、芳雄さんの言葉の餘りに奇なるに驚嘆して、一人として眞面目に受取るものはなかつた。平生何々云はずや、何々云はずや、と世界の大智識を口にせる哲學科の友達も芳雄さんの言葉が能くは解らなんだ。たゞかの人生問題の爲に悶絶して遂に身を華嚴の深淵に托した吉村某のみは、固く芳雄さんの言葉を信んじたとの事有る。

(九)

それから頂度一年許りを過ぎた頃で有った。芳雄さんが矢張夕暮に、自分の裏筋と同じやうな狭い町を通られた時に、又しても大きな一個の石が道の真ん中に

轉がッて居た。で芳雄さんは何氣なう偶へ寄せられやうとしたが、花枝さんの事を思ふと戦慄して手を引かれたが、何に、花枝さんの様な場合は稀有で有る。又たとひさう云ふ場合が度々有つたにしたとあるが、自分の其時の動機さへ善で有ればそれで充分だ。一寸先きは開みの世に、末の事まで如何して解る。たとひ自分が世の倫理標準を越えて狂人と云はるゝもかまわず此石を安全な所へ背負ッて行つた處が、それで此石が絶体に人に災禍を持ち來たさぬものだとは斷言が出来まい。自分は今此石を隅へ寄せて置くの其れが比較的安全だと思ふ。別に確とした理由はないがたゞさう思ふ。さうして其れは幾分か自分の善意を満足させる。モーたれで充分だ。たとひ後に其れが如何な結果を持ち來たさうと、ろんな事が人にわかるか、エイ。と許り其まゝ強く石を偶へ蹴ッて、傍目もふらさすたゞ行ッて終はれた。が、我が悪心ぢやない善心すら逞しくならぬ人世に對して其處に大なる怒りが有つたから、石は強く轉んじて直ぐ傍の黒板塀に衝突すると、其板塀の下

部を少し破壊して又元の位置近くまで戻ッた。此時此黒板塀の内では臺所で〇〇大學の老プロフェッソル。倫理科擔當の道學先生が、下女を膝下に呼んで頻りに何事かその不謹慎を責めて居られたが、——大方飯でもコワカッタ位の事か。此物音をきゝつけてさてある我家に異狀有り、急いで出て來られたが、先づ敏捷にもかの黒板塀の破損に眼をつけついで石を見らるゝと、「ヤアあんな大きな石を放ッてよましたとみぬる。どうも今の若者は亂暴で困る。みんなものにミユアヘッドの動機論でも吹き込んだらろれまう事だ。明日は之れを例に一ツ天下の青年を戒しめてやらう。」と呟ひて、恨めしさうに手づからかの黒板塀の破ぶれのみを慇懃に繕ろッて、さてかの石に就ては何等の惱みもいだかず、其まゝ家へ入ッて行かれました。

さらば明日は、今日の恨みと、自分の學理に對せる執着の熱誠、——と云ッても畢竟は自分の小なる主觀の範圍内で自分に都合善き様に定めた小理屈で有る

が、イヤ此先生のは寧ろたい自分の讀んだ書籍の小理屈が何時しか自分の生存の主張の如くなつた小理屈で有るが兎に角これに對する執着の熱誠を以て、老ひて益々盛んなる、悪く云ふと慾の皮のいよゝ厚びつた豚を殿めしき演壇の下にたてつて、滔々と現今青年の輕躁暴漫を戒めミユアヘッドの動機論に就て大駁撃を遣らるゝで有らうが、性は善なる疲れやすき弱い人の子に、何處までも安全な場所を得るまで彼の石を背負つて行けど云ふやうな無理な事を云はれねば善いが。

聞けばかの青山様の裏門の筋の長屋の松ちやん、お銀ちやんなど云ふ例の小國民たちは又ぞろ今日何處から引き出して來たか、前にも増さる一個の大きな石を、然かも繩さへつけて、エイサ、エイサ、の掛聲勇ましく、例の狭き往來を引きつり廻はつて居たさうで有るが、其中に車屋の神さんが之を見つけると子供たちに嚴しい險の實を喰はして、繩を切り石をかたづけさせたさうで有るが、其時子供らは暫時呆氣に取られて、何故なんな慘酷な事を爲るのか話せない奴と眼云つたやう

にを睨つて訝しさうにお神さんを見詰めて居たさうで有りませ。

あゝ此の無邪氣な子供とかの道學先生は、此の人の手で太安く左右せらるゝやう見ゆる一個の石でもが、永へに人の手で左右まべからざる、或る大なる命運のキズナにつながれて居ると云ふ事を久へに知つては居られません……！。

附記。此れは往年ミユアヘッドの動機論に就いて盛に論議が有つた時分、フト思ひ就て試みに作つてみたので有るが、其後年を経て一昨年夏頃、又思ひ立つて始めて東都の某新聞に寄せたが、どうも没收されたらしい。が、能く考へると新聞物としては甚だ難澁な處が有るから亦信に無理もない處も有るが。兎に角自分此篇に、此一小短篇に、人々の甚深な考察を要する人生の悩み……少なくとも智識に於ては現代科學の新教育を受けて人の可能に立脚して一切の、運命の所在が信せられ、然して自己の徳操に於ては尙從來の佛敎的、儒敎的、基督敎的愛情の教を奉ずる現代一部の青年の事に觸れ時につれて必然抱さくべき悩みがあらは

れて居ると確く信んずる。たとひそれが人格の悩み——破壊と再造の甚しき悩みになるまでに至らずとも現代の青年の中には憊う云ふ慰むに道のないイヤ感情に裏はれらるゝ場合が有らうと信ずる。して此篇に就いては或目的の爲めに技術の失陥を態とした處の有るのを斷つておく。

一個の石終

252
832

明治四十年三月廿三日印刷
明治四十年三月廿七日發行

九

勝利

金四拾錢

不許
複製

名古屋市東洲崎町三十二番戶

著作兼發行者 鈴木元次郎

名古屋市南伊勢町十六番戶

印刷者 日下部純三

名古屋市南伊勢町十六番戶

印刷所 能仁社

名古屋市東洲崎町三十二番戶

發行所 勝利發行所

引換へ感情を多く入た作物で有る
有る。此は此篇の理屈多きに
五十枚許りの一篇が
持らたひ約三百
行の機言を
ひて發
の適照が
罪
れたい
増に對する我
才
作として試に現
今文
彼此異れる二篇を我
の處女